The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イメージとしての「日本」 : 日本文学翻訳の可能性
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12926
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Osaka University
The 21st Century COE Program
Interface Humanities Research Activities
2002*2003

イメージとしての〈日本〉

Osaka University The 21st Century COE Program Interface Humanities Research Activities 2002*2003

大阪大学21世紀COEプログラム
インターフェイスの人文学
文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科
2002・2003年度報告書

イメージとしての〈日本〉

Imagined Japan

日本文学　翻訳の可能性

Japanese Literature——The possibility of translation

Group 4

イメージとしての〈日本〉　構成メンバー

伊井春樹　〈文学研究科教授〉
出原隆敏　〈文学研究科教授〉
金水　敏　〈文学研究科教授〉
荒木　浩　〈文学研究科助教授〉
海野圭介　〈文学研究科助手〉
藤井由紀子　〈文学研究科研究員(COE)〉
加藤昌嘉　〈国文学研究資料館助教授〉

以上報告書担当メンバー

伊藤公雄　〈代表者・人間科学研究科教授〉
荻野美穂　〈文学研究科助教授〉
川村邦光　〈文学研究科教授〉
杉原　達　〈文学研究科教授〉
冨山一郎　〈文学研究科助教授〉
中村生雄　〈文学研究科教授〉
真鍋昌賢　〈文学研究科助手〉
山中浩司　〈人間科学研究科助教授〉
Mark Mail　〈関西大学講師〉
牟田和恵　〈人間科学研究科助教授〉
黄　順姫　〈筑波大学助教授〉
表　智之　〈文学研究科研究員(COE)〉
山中千恵　〈人間科学研究科 RA 博士後期課程〉
伊藤　遊　〈文学研究科 RA 博士後期課程〉

目次

007　はじめに　伊井春樹

009　21世紀COE「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会
「日本文学の魅力／翻訳の可能性」概要報告

013　シンポジウム　日本文学の魅力 — 留学生にとっての日本文学研究

014　パネラー・司会紹介

015　シンポジウム　日本文学の魅力 — 留学生にとっての日本文学研究—　海野圭介

019　古典文学が今日持つ意味　タケシ・ワタナベ

023　台湾における日本文学研究の現状について　廖秀娟

029　タイにおける日本文学 — その海路 —　マッタナー・チャトゥラセンパイロート

033　古典文学と翻訳　テレサ・マルティネス・フェルナンデス

038　カジュアル・ソーセージ、コーンぬき　ジャック・ストーンマン

043　柳宗悦の朝鮮芸術論 — 韓国人によるの評価の概観 —　金容菊

049　シンポジウム　日本文学　翻訳の可能性

050　パネラー・司会紹介

051　シンポジウム　日本文学　翻訳の可能性　伊井春樹

053　翻訳の危機　翻訳の価値　エドワード・ケイメンズ

058　The Dangers of Translation and the Value of Translation　Edward Kamens

065　和歌の現代語訳と翻訳 — 伊勢物語を中心に —　ジョシュア・モストウ

074　Modern Renditions and Translation of Japanese Classical Poetry, With Special Reference to *Tales of Ise*　Joshua Scotto Mostow

082　与謝野晶子の『新訳源氏物語』— その誤訳の意義を中心に —　ゲイ・ローリー

090　誠実さ、それとも正確さ？　遠藤周作文学を訳してみて　マーク・ウイリアムズ

101　Fidelity, or Accuracy? On Translating Endō's Literature　Mark Williams

115　補足・質疑・応答

134　日本古典文学翻訳データベース

Alphabetical list of translations of classical Japanese works up to 1600

マイケル・ワトソン　緑川真知子

はじめに

伊井春樹

21世紀COEプログラム（人文）は、「インターフェイスの人文学」をテーマし、複数文化をインターフェイスの相で動的に見てゆく二つの新しい知、つまりは〈横断的な知〉〈国家・地域を横断する人文学の知〉と、〈臨床的な知〉〈文化の諸次元、とりわけ研究者と一般市民とを架橋する知〉との可能性を探求することを目的とする。さらには、生成と変化の現代世界を、アクチュアルにとらえるための人文学の知そのものの再編と構造転換に取り組むことも意図して研究の推進をしてきた。

それを実現するための具体的な研究テーマとして、「交錯する世界」「縫合される日本」「越境する芸術文化」「臨床と対話」を立てており、本研究は「縫合される日本」のうちの「イメージとしての日本」を中心課題としてさまざまな活動をしてきた。グローバリゼイションの進展とともに、さまざまな文化的境界を横断していく文化現象が登場し、衝突や摩擦を惹起しながら多様な社会への移行が展開している。その越境する日本文化として、具体的に日本の文学や文化がどのようにインターフェイスの相のもとで相互に交流し、理解され、また異なる言語に翻訳されていくのか、文学だけではなく、文化、歴史、美術等をも視野に入れて共同研究や大学院での授業を進めてきた。

2002年から2003年の事業として、大きくは3つの研究・教育活動を実施してきた。1つは日本の文学や文化を理解する上にもっとも根本となる翻訳の問題で、2003年1月にロンドン大学教授アンドリュー・ガーストル氏による「パフォーマンスの翻訳の可能性」の講演を求め、多数のスライドを用いての役者絵、とりわけ上方歌舞伎の絵画資料の問題点など、翻訳という問題をテーマにしてのきわめ興味ある内容であった。学生、卒業生、学外者なども含めて100人を越す盛況で、感銘深いものとなった。

第2点は、本年3月に催した「日本文学　翻訳の可能性」の基調報告とシンポジウムの開催で、海外からの研究者による古代から近現代文学にいたる日本文学の翻訳 — それは文化の翻訳でもあるが — さまざまな問題点、さらに日本文学研究の交流の問題などが提起された。さらにそれに先立ち、大阪大学大学院の留学生6人による、日本文学の翻訳に関連した「日本文学の魅力」のシンポジウムも開き、多方面からの日本文学及び日本の文化理解の諸問題が討議された。このような交流は、今後の日本のイメージをどのように海外に伝え、情報を発信していくのか、日本人の学生を含め、今後考え、行動していく大きなファクターとなるであろう。なお、これらの記録を今回の報

告としてまとめることにした。

なお、海外の日本文学の研究者たちが、どのように翻訳の問題を考えているのかという点について、従来ほとんど知られていなかったチベットにおける日本文学の受容と翻訳、研究について(ギャロッポ・アラヤ氏)、インドにおける日本文学の翻訳とヒンディー語の問題(ウニタ・サタチナンド氏)、さらにタイにおける日本文学研究と翻訳の可能性(スワンラダー・アッタヤ氏)、スロヴァキア語における近代日本文学の翻訳(エヴァ・ルカーチョヴァー氏)など8人の論文の寄稿をいただいたが、ページ数の制限から別途公開となった。

第3点目としては、イギリスのリチャード・ゴードン・スミスの日記と日本昔話の研究である。1989年(明治31年)に初めて日本を訪れたスミス(当時40歳)は、幾度か帰国することはあったものの、日本に居を構えて滞在するようになり、神戸を拠点として日本の文化や政治、文学に関心を持つようになる。スミスは、本来は冒険家として、各国を探訪した人物であり、東洋における日本に関心を持ち、そのまま滞在するにいたる。日本の明治期の西欧人による記録は、外交官の日記が中心であり、政治的な動向を知る必須の資料といえる。ただ、スミスは、まったくの民間人として来日し、地方に住みながら、日本の文化や古い物語に関心を示すようになってゆき、駐英公使や多くの日本の有力者との接触などを記録してまとめ、一部をロンドンで出版するにいたる。まさに、インターフェイスの人文学のテーマにふさわしく、日本文学の翻訳とは逆に、海外から日本を訪れ、そこで日本の文化に触れ、西欧との違いを発見していったのである。日本を訪れるまでの日記とともに、日本滞在の詳細な日々の記録がある。スミスは、日本人の風俗、習慣、昔話に関心を持ち、写真を撮るとともに、絵師にさまざまな絵を描かせ自身の日記に添えていった。この日記は、1915年の57歳まで継続しており、これとは別に日本の昔話と記録した冊子が5冊あり、約300話を収集している。昔話については、日記にラフガディオハーン(小泉八雲)との関係の記述もあり、かなりハーンを意識していたのは確かなようで、そのような観点からも興味深い内容といえよう。2003年度の大学院のCOE科目として十数人の参加のもとにスミスの昔話を読み、内容の詳細な検討も加えており、いずれはその全体像を明らかにしていきたいと思っている。スミスが収集した昔話の大半は日本の怪談話で、一話ごとに、専門の絵師に挿し絵を描かせており、かなり当初から出版を意図していたようである。ただ、実際にまとめられたのは、その内の一部がロンドンで公刊されたにすぎなく、未公開になった昔話も多い。ハーンとの比較、明治期における日本の昔話の流布等、外国人による収集だけに、インターフェイスの人文学という視点からも興味深いテーマといえよう。

21世紀COE「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会
「日本文学の魅力／翻訳の可能性」

日時：2003年 3月16日（日）　10時―17時
会場：グランキューブ大阪（大阪国際会議場）　参加者：約180人余

2002年3月2日に日本文学国際研究集会として「国際化の中の日本文学研究」をテーマとしたのに続き、今年度は、大阪大学文学研究科の留学生たちによる「日本文学の魅力」と、海外の日本文学研究者による「日本文学　翻訳の可能性」という2つのテーマで、基調報告とシンポジウムを開催した。とりわけ今回は、21世紀COEプロジェクト「インターフェイスの人文学」のもとに、「日本文学の海外への越境による翻訳と変容」を課題とした。もちろん、日本文学を日本語以外の言語に翻訳するだけではなく、海外の作品を日本語に翻訳することをも含む双方向の問題と関わるテーマであるが、ここでは文学一般の翻訳論ではなく、日本文学の研究を世界的な視野のもとに置くために、研究成果や研究資料等をどのように翻訳し共有すべきかという点について討議することを目的とする。

日本文学の研究は、従来「国文学」と称していたように、日本の文学としての位置づけを前提とし、研究者間での共同研究を始め研究の交流・情報交換は、国内で行われることが伝統として存在してきた。ただ、海外における日本のマンガブーム、現代文学の吉本ばななや村上春樹の作品の翻訳など、海外への越境による翻訳が、日本国内では考えられなかった現象を呈しており、そこから着実に日本文化のイメージの変容が進行している。それは現代文学に限らず、古典文学の代表的な作品である『源氏物語』についていえば、明治時代の末松兼澄の翻訳はともかくとして、1925年から1933年にかけてのArther Walyの、あまりにも有名な"The Tale of Genji"50年後の、これまた版を重ねたEdward Seidensticker訳があり、さらに2001年にはRoyall Tylerの、英語圏における3人目の翻訳（Viking Press）が出版され、2003年になってこれがPenguin Classicsからも出されるなど、『源氏物語』の存在は、〈国文学〉としてではなく、〈世界文学〉としての位置づけを確保しているといっても過言ではない。英語だけではなく、フランス語、ドイツ語、ロシア語、チェコ語、中国語（大陸と台湾の2種類）による翻訳があり、英語訳からの重訳としてはイタリア語、オランダ語、スウェーデン語訳もある。ほかに知っているところでは、イタリア語や韓国語でも原文から直接の翻訳作業が進められている。それにともなって、当然のことながら『源氏物語』や平安文学への関心を持つ海外の研究者も増えており、研究書や多くの論文も見いだすことができる。ただ、研究がなされているといっても、日本ではほとんど知られておらず、研究者の交

21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」
日本文学国際研究集会
主催：大阪大学21世紀COE（人文）事務局　後援：国文学研究資料館

流も一部を除いてはほとんどなされていないのが現状である。今後は、世界的な視野のもとに、研究を相互にどのように共有し、交流を推進するのか、そこでの〈翻訳〉の果たす役割の方法や意義が問題となってくるだろう。この点について討議したのが、今回の基調報告とシンポジウムである。

午前中は、大阪大学文学研究科の留学生6人、タケシ・ワタナベ(「古典文学が今日持つ意味」)、廖秀娟(「台湾における日本文学研究の現状」)、マッタナー・チャトゥラセンパイロート(「タイにおける日本文学 — その海路 —」)、テレサ・マルティネス・フェルナンデス(「古典文学と翻訳」)、ジャック・ストーンマン(「カジュアル・ソーセージ、コーンぬき」)、金容菊(「柳宗悦の挑戦芸術論 — 韓国人による評価の概観 —」)による報告とシンポジウムがあった。それぞれ、出身の国において、どのように日本文学と関わり、どこに魅力を感じて研究を志すようになったのか、また翻訳のあり方などについて、興味深く発表し討論しあった。

午後からは、海外の日本文学研究者として著名な4氏、エドワード・ケイメンズ(「翻訳の危機、翻訳の価値」)、ジョシュア・モストオ(「和歌の現代語訳と翻訳 — 伊勢物語を中心に —」)、ゲイ・ローリー(「与謝野晶子の『新訳源氏物語』— その誤訳の意義 —」)、マーク・ウイリアムズ(「誠実さ、それとも正確さ? — 遠藤周作文学を訳してみて —」)に基調報告をしていただき、それをめぐってシンポジウムを行った。これには熱心な討議がなされ、東北から九州まで、各地から参加した日本文学研究者だけではなく、外国文学の専門家や翻訳家も議論に加わり、とりわけ和歌をどのように訳し、伝達するのか、興味深い内容が展開した。

なお、後半の部については、国際教育チャンネルを通して衛星テレビで放映され、またインターネットによる配信もあり、後日好評であったとの評価を得た。さらに、今回は国文学研究資料館が後援となり、日本文学研究のデータベースのデモンストレーションがあり、また日本文学の翻訳書(福田文庫)57冊の展示もあった。展示されたのは、古典から近代文学にいたる、世界十数カ国語による翻訳書であり、その詳細な解説目録も配布され、「翻訳の可能性」のシンポジウムにふさわしい内容であった。

シンポジウム

日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究

報告者

タケシ・ワタナベ

大阪大学大学院・大学院研究生（日本文学）／Yale University（USA）・Ph.d.candidate
専攻:日本古典文学　研究テーマ:『栄花物語』、物語の歴史性　出身:アメリカ

廖秀娟

大阪大学大学院・博士後期課程（日本文学）
専攻:日本近代文学　研究テーマ:中島敦作品研究　出身:台湾
廖秀娟「中島敦「弟子」論」（待兼山論叢 第36号　2002年12月）・等

マッタナー・チャトゥラセンパイロート

大阪大学大学院・博士後期課程（日本文学）
専攻:日本近代文学　研究テーマ:川端康成作品研究　出身:タイ

テレサ・マルティネス・フェルナンデス

大阪大学大学院・外国人客員研究員（日本文学）
専攻:日本古典文学　研究テーマ:源氏物語　出身:スペイン
Teresa Martinez Fernandez、"Fence" as metaphor in Heian Literature.Part1（比喩としての「垣」（上））、
詞林 第32号、2002年10月・等

ジャック・ストーンマン

大阪大学大学院・大学院研究生（日本文学）／Columbia University（USA）・Ph.d.candidate
専攻:日本古典文学　研究テーマ:西行　出身:アメリカ
Translator, Nonomiya（Shrine in the Fields）, Pure Land Writings and Poetry（Honen, Shinran, Ippen）, Poems of Saigyo, Senjusho（sel.）. Haruo Shirane, ed., Pre-modern Japanese Literature: An Anthology. New York: Columbia UP, forthcoming.
Author, "Saigyo in the Noh." Paper presented at the Western Conference of the Association for Asian Studies, September, 2002.

金容菊

大阪大学大学院・博士後期課程（日本学）
専攻:日本（文化）学　研究テーマ:柳宗悦と朝鮮芸術論　出身:韓国
金容菊「柳宗悦と朝鮮芸術論」（日本学報 第22号　2003年3月）・等

司会

海野圭介

大阪大学大学院文学研究科　助手

シンポジウム　日本文学の魅力 ── 留学生にとっての日本文学研究

海野圭介

テーマ設定とシンポジウムの意図

「日本文学の魅力 ─ 留学生にとっての日本文学研究」のテーマで各国からの留学生をパネラーにシンポジウムを行うことの意図について先に述べておきたい。

それぞれの出身国・地域の現状により、留学の意図や目的は様々であるが、それぞれに期待と不安を抱きながら、毎年、多くの留学生が日本へと赴き、日本人学生・院生・教官等との研究上の、あるいは、もっとくだけた交流の中から何かを学び、成果を得て、多くは帰国の途につく。学ぶことのプロセス自体は、日本人学生であっても留学生であっても何等違いはないであろうが、殊に、「日本」を対象とする日本文学、日本文化学の研究においては、使用言語や日常の生活体験、学習経験等の様々な面において日本人とは異なる環境にある留学生は、日本人学生が想像もしないような苦労を経験することもある。大学院の学生の頃から懇意にして下さる中国人研究者の方が、時折、日本人としての経験の重みのようなものについて漏らされることがあるが、稿者などは、そうした指摘がなければ、日本人としての経験などといったことは頭に上ることはなく、また、そうした事柄の利点を具体的に数え上げることもできない。それ程、日本人にとっては自明であることが、日本人以外にとっては苦労の種となるということなのであろう。しかしながら、逆に日本で生まれ育った故に目の行き届かない事柄も意外に多いのかもしれない。大阪大学大学院文学研究科国文学・東洋文学講座には、現時点で30人弱の留学生が所属しており、留学生／日本人学生を問わず大小様々な研究発表が行われ討議が繰り返されている。基盤となる知識や思考方法の相違により、必ずしも互いの合意に至らない場合もあるが、そうした議論自体が、留学生にとっても日本人学生にとっても刺激となり、それぞれに有益な経験の蓄積となっている。

留学生は、日本における滞在経験と研究成果を自国に伝え（場合によっては、作品そのものをはじめて伝える役割をも果たし）、それぞれの国の日本文学・文化学研究を推進してゆく役割を負う人材である。これからの研究領域を切り開く立場にある留学生の率直な意見 ─ 何を考え、どういった事柄に関心を寄せているのか？等々 ─ を求めることには、既に多くの実績を積まれた諸先生方の講演を伺うのとは、また違った関心が寄せられることと思う。

また、留学生は、我々日本人研究者と共に研究成果の蓄積や研究環境を共有してゆく研究者でもある。勿論、そのためには、日本における研究を対外的にアピールするのみに留まらず、日本人研究者側も海外における日本文学研究の蓄積と現状を理解してゆかなければならない。自国と日本との両様（或いは、それ以上）の研究環境を知り、その中で今の生活をおくる留学生からは学ぶことも多い。

大阪大学では、昨年度（2001年度）は、大阪大学国語国文学会を主催として「国際化の中の日本文学研究」というテーマで研究集会が行われ、その場でも留学生をパネラーにシンポジウムと討議が行われた。討議の中で、情報化、情報の共有化が進み、自国に居ながらに必要な情報を得ることの難しくはない現在、日本に滞在し研究することの意義の一端は、研究を行う人と人との交流にあること、そうした研究者同士の繋がりが、新たな進展の可能性を開くこと、などの意見交換がなされた（なお、その成果は、『国際化の中の日本文学研究 ― その課題と方法への模索 ―』（大阪大学国語国文学会 2002･3）として纏めている）。

今回のシンポジウムは、そうした議論を受け、留学生を対象に、なぜ日本文学に惹き付けられるのか？なぜ日本文学を研究対象とするのか？といった素朴な質問を端緒に、日本文学の魅力を探ることをテーマとしている。

報告者紹介

本シンポジウムに報告を寄せて頂いたのは下記の６名である。各発表につき稿者の聞き及んだ事柄について簡略に纏めておきたい。なお、各報告者の所属・専攻・研究テーマ等については別途記載のある頁を参照願いたい。

タケシ・ワタナベ氏は、『栄花物語』を研究対象とするに至った関心の在り方についての自照を

端緒に、古典研究の価値について述べられた。ワタナベ氏の示された翻訳や対異文化についての意見は、現在のアメリカにおける研究者の関心の方向性を示唆している。

廖秀娟氏は、台湾における日本文学研究の現状の報告を踏まえ、作品へのアプローチの相違やそれに伴う自身の研究上の悩みを具体例を持って示された。そうした現状分析の上で、主としてアジアの国々における日本文学研究の発展において留学生の果たしてきた役割を確認し、日本人研究者のアジア諸国への参入についての提言があった。

マッタナー・チャトゥーラセンパイロート氏は、タイにおける日本文学翻訳の現状についての報告と共に、英訳からの重訳に起因する誤訳等の問題、日本とタイとの読者層の指向性の差異などについて述べられた。従来関心の払われてこなかった興味深い事象についての報告であった。更に、そうした、問題を超えて日本文学を伝える立場としての自身の課題について補足が加えられた。

テレサ・マルティネス・フェルナンディス氏は、スペイン・ヨーロッパにおける日本文学研究の現状についての報告と、『源氏物語』を研究対象とする自身の経験やスタンスの在り方、また、古典作品研究・翻訳に対する自身の立場について述べられた。本文に対する注の在り方を含めた翻訳方法についての提言は、欧州における関心の在り方に由来すると思われるが、先のワタナベ氏や後のストーンマン氏の意見に通じるところがある。

ジャック・ストーンマン氏は、テーマを和歌の翻訳における問題に絞り、自身の研究対象とする西行の和歌を翻訳する際の留意点について、先行の翻訳と対比しつつ述べられた。翻訳に際し何を重視すべきか？　といった古くて新しい問い掛けに対し、NEXUS(結合関係)の重要性について示され、翻訳に対する注の在り方についても提言があった。なお、和歌の翻訳については、後のシンポジウム「翻訳の可能性」の席上でもストーンマン氏の提言を基に討議が繰り返された。

金容菊氏は、韓国芸術論の研究に対し、必然的に喚起される日本人評論家・柳宗悦の著述の、韓国における評価の変遷について述べられた。文学作品が翻訳され受容されるといった問題とはまた別に、日本人の著述が対外的にもたらした影響とその変遷については、関心が払われて然るべき事柄であろう。

質疑に関する付記

開始時間の遅れや、基調報告の延長等による時間の制約から、フロアーからの質疑とそれに対する応答は最小限に留めざるを得なかったが、下記の諸点につき意見交換が行われた。

(1) 翻訳は、単なる文章表面上のTranslation(言い換え)ではなく、各言語圏における理解を示すもの、つまりは文化的事象の翻訳である必要がある。

(2) 但し、そうした翻訳は、自己の経験を率直に翻訳に反映するといった素朴な作業ではなく、テキストへの違和感（エキゾティシズム、文化的な距離、等）を捨象することなく、1つの言語、文体の持つ可能性を追求する必要がある。

また、翻訳と研究に関わる現状分析として、下記の提言があり、意見交換が行われた。

(1) 日本への留学生の多い台湾においても、研究方法等の情報の流通が速やかではなく、日本人講師の参入が望まれる。

(2) 主として東南アジア圏において、重訳（主として英語から他言語への）によって誤訳等の問題が生じている。

上記、(1) については、諸外国・地域への日本人講師派遣の現状と必要性について意見交換がなされた。(2) については、現に流通する翻訳を突き合わせてゆく必要性、原典 — 翻訳という一対一の関係としてではなく、複数の翻訳の存在をネットワーク化すること（メタ化してゆくこと）の必要性と可能性について意見交換がなされた。

[付記]　報告を頂きましたパネラーの方々、席上、或いは、シンポジウム後、また事前に質問、御意見を賜りました方々、進行にご協力いただきました伊井春樹教授、藤井由紀子COE研究員、真鍋昌賢助手（日本学）をはじめ大阪大学大学院の教官・院生諸氏に御礼申し上げます。

古典文学が今日持つ意味

タケシ・ワタナベ

日本人の方によく聞かれます。「なぜ日本文学なのですか、特に古典」。私自身にもはっきりした答えはありませんが、今回その質問に対して考えながら、『栄花物語』に関する私の研究内容を簡単に紹介させていただきます。

外国人が日本文学を読み、研究する事に日本人が驚くのは当然でもありましょう。日本語は勿論難しい言語です。しかし、この驚きは言語を超え、認識上、両文化の間にある遠い距離を表しているのではないでしょうか。外国では、どうしても日本、特に日本文学と接する機会は少なくなります。外国の日本文化の研究者には、みな、日本との初めての出会いに関する逸話があります。中には面白い話もありますが、私の経験では案外平凡な話の方が多いようです。何時か偶然に日本の小説を読んで面白かった。とても僅かな出会いに聞こえますが、その偶然出会った日本文学が持つ魅力は、その後、学者になるほどなら、それほど僅かなものでもないでしょう。それは、いったいどういうものなのでしょうか。

文化的作品に表れる人の情は国の境を越え、時代をも超える、とよく耳にします。文学の場合は、翻訳で紹介されることが多いので、極端に言えば、外国の文学作品だからといって何も通じないというはずはありません。この「媒介」の役割は、翻訳者にとっては重大な責任です。隔てた文化が伝わるようにしながら、その隔てた文化の差を消してはいけません。日本文化と西洋文化、あるいは、古代と現代が持つ共通点も重要ですが、その差に、私は特に魅力を感じます。

光源氏の事を読んだからといって、物語どおりの生活を行えるわけではありませんが、そういう生き方、考え方は、私たち人間に潜んでいる、豊かな可能性を心に開いてくれます。個人的方針によって、その雅的生き方は顰蹙を買う事もありますが、文学作品はこういう人間的可能性を事実から距離があるため穏やかに紹介してくれるので、反感を持っていても、受け入れられるようにしてくれます。今日、「正義」か「悪」、例えば、戦争に「賛成」か「反対」というような、単純な、貧しい考え方が広がっている世の中には、こうした多数の可能性を認められる豊かさが欠けています。だからこそ古典文学は、今読まれるべきだと私は思います。

『栄花物語』を読み、私が感激したのは、こうした二元的発想に容易に嵌らない点です。『栄花物語』の「栄花」は、明らかに藤原道長の成功を指していますが、それだからと言って、出世できな

かった中関白家、藤原道隆の家に対して軽蔑的ではありません。道隆の息子、伊周の追放に対して、前例の追放話（菅原道真、源高明）の影響もあり、『栄花物語』の描写は同情的です。又、道隆の娘、定子皇后に対して『栄花物語』は特に同情に溢れ、道長を支えてきた姉、藤原詮子との僅かな交流を暖かく描いています。一世代後に三条天皇の娍子皇后と賢子中宮の時も『栄花物語』は負けた側を哀れんでいます。

歴史は勝った側が書くとよく言われています。この発言は、歴史が今まで世界中の権力者に利用されて来た、歴史と創作の境の曖昧さを指しています。『栄花物語』の理想的世界も、道長の大らかさを描くことによって、道長を賛美しているとも言えますが、その良く描こうという意図があったとしても、逆に、道長は決して誰でも憧れる人物ではないという可能性を認識していたとも思えます。とにかく、歴史的事実であっても（道長の成功は否定できません）その語り方によって、この現在にたどり着く道は変わると『栄花物語』は暗示しています。言語や文体によって、伝えられる内容も変わり、決して歴史は男性征服者の話のみではなくても良いと、十一世紀の老女が把握したのです。

作者、あるいは編集者と言われている赤染衛門（c.955-1041）の頃には、史と言えばだいたい六国史や外記日記、古記録などを指しました。歴史は漢文で書かれていて、男性の世界を記録するものでした。しかし、『日本三代実録』（901）後、六国史は続かず、律令制が弱って行き、摂関政治が強まるとともに、歴史に対する感覚が広まりつつあったのではないかと私は考えています。一言で歴史と言わずに言い換えれば、何をどう記録して他人や新たな世代に伝えておくべきかという感覚が変わりました。この変化は、『源氏物語』の蛍巻にある有名な物語論に明らかに述べられています。周知のように、玉鬘と談じている源氏は物語は決して空言ではなく、歴史に現れない真実を伝えてくれると言います。「『日本紀』などはただかたそばぞかし。これら［物語］にこそ道々しく詳しきことはあらめ。」

玉鬘が夢中になって物語を読んでいるのをからかった後、源氏は今度は大げさに物語を褒めます。この冗談の塩梅は解釈を難しくしますが、単に源氏の考えが紫式部の考え、または平安時代の一般的考え方だったとは断定できません。それにもかかわらず、『栄花物語』をみると、『源氏』の物語論は、少なくとももう一人の女流歌人の心には響き、物語の歴史性を訴えたと思えます。1960年代から阿部秋生氏や坂本太郎氏は『源氏物語』と『栄花物語』を繋げて考えてきました。決して『源氏』によって『栄花』が可能になったとか、影響したとかは確認できませんが、その頃、限られた社会の中では、「歴史」の扱い方が広がっていったのではないでしょうか。そして、その比較的新しい物語の文体や世の中の見方を用いると書きあらわせる事が増え、今まで表せない事も未来に残せるのではないかと紫式部は筆を進めながら気が付いたのではないでしょうか。

『栄花物語』に関する評価には、「つまらない」というような例が今まで多いように思います。松村博司氏は、歴史としては正確ではないし、物語としては面白くない、とまで『古典文学大辞典』に書いています。この意見は1980年に『栄花物語』の英訳を出版されたマッカッラ氏達（William and Helen McCullough, A Tale of Flowering Fortunes, Stanford University Press）にも若干共有されており、現在までの間、アメリカでは、『栄花』は平安時代の宗教習慣や美術的情報の収集のために使われてきており、文学の研究においても、歌合の記録とか、平安時代の歌の場を吟味するためばかりに利用されてきました。『栄花物語』そのものを文学作品として読む事は少なかったと言えます。

ただ、比較的早く英訳された平安文学作品でも、まだまだ翻訳を目的とするのではなく、翻訳を超えるような研究は、数えられるほどしかありません。研究の発展を決めていく事情は様々あり複雑で、また、文学評論の対象は個人の好みにもよりますが、『栄花物語』が、ドナルド・キーン氏がおっしゃる「消化できない細部の集まり」（Seeds in the Heart, Henry Holt, 1993）だと思われるのは残念なことです。十一世紀の終わりに、今まで歴史を書くことがなかった女性が、歴史ともはっきり認められていなかった事々を表すために言葉を探し出し、細かく書き上げた作品はけして軽く扱うべきではありません。どのくらい勇気と自信が必要だったでしょうか。不思議にフェミニスト評論にもまだ『栄花』は作品として現れず、この重要な達成は認められていません。

『栄花物語』には勿論それなりに不完全な歴史で、間違いもあれば、失敗と言える部分も大いにあるでしょうが、この言語の冒険に私達も十分学ぶことができます。赤染衛門も気付いていなかったかもしれませんが、歴史には色々な解釈があるだけではなく、使う言葉によって伝えられる内容は変わります。『栄花』は数多くの資料から情報を得るだけではなく、その言葉、文体と発想を用いて、それまでなかった「歴史」を残しました。例えば、源信の『往生要集』（985）を借り、道長を仏に例える事も権力者に利用されているとみるより、当時の表現の限界にぶつかりながら完全な真実に辿りつこうとしているように感じます。

外国の文学を読み、古典を読むことによって、私達が通常しないような、慣れていない発想に接するとそれだけ理解力も豊かになります。人間は言葉を通して考えることが多いだけに、言語の境を押しつけなければ、絶えず慣れた発想から進歩することはできません。ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』や泉鏡花の『歌行燈』が私達の言語能力に挑戦するように、不安に増さる難しさを乗

り越え真剣に読もうとすれば、古典も現代人にこのような刺激を与えることができるのではないでしょうか。

翻訳者には異文化を紹介する重要な役割があり、その役割を果たすためには、多少読者を困らせても、一つの言語や文体が持つ可能性を、絶えず疑問視しながら広げていくことが必要不可欠で、そうしなければ、役割を完全に果たしたとは言えません。この何年かの間、私は『貞信公記』の一年間分を英訳する事業に参加させていただきましたが、そこでも情報を正確に、分かりやすく伝える歴史家の方針と、文体を英語で出来るだけ作り直し、理解し難くても、古記録の味わいを伝えたいという文学者の意見がぶつかりました。「古記録」は「文学」か、とはまた別の話題になりますが、どのような点を強調するか、日本文化をどのように紹介するか、そうした議論と翻訳・研究は、とても難しい勤めですが、遣り甲斐のある仕事として、とても爽快な気持ちを私に与えてくれます。

〈イエール大学大学院　大阪大学大学院文学研究科 大学院研究生（日本文学）〉

台湾における日本文学研究の現状について

廖秀娟

八年前に大学の必修科目である日本近代文学鑑賞の授業で初めて中島敦の「山月記」を読んで心を打たれました。もし彼がもっと長生きしていたら、どのような小説を書いてくれてたのだろうかと常に想像してきました。彼の作品を読みたい、彼についてもっと知りたい、その感動を胸に抱き、国費奨学生に受かったら日本へ留学してみたいと思いました。そして、六ヶ月間も続く試験期間中に、神経が病みそうな時期を支えてくれたのは1995年台湾で上映された岩井俊二監督の「ラヴレター」でした。映画の始まりには一面にわたり限りない雪世界が広がります。場所は神戸と小樽。頭に浮かんできたのは川端康成「雪国」の冒頭部「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた」によってイメージされた日本でした。この試験を通り抜けたら私はあの日本へ行くことが出来るのだと自分に言い聞かせました。その甲斐あって私は中島敦と岩井俊二の本を抱え日本に参りました。しかし、何故か目のあたりに見た景色は岩井俊二が表現した世界とまったく違います。神戸と大阪はそれほど離れてないのに、六年間大阪にいて、雪の降るところは見ましたが、積っている景色は一回も見たことがありません。雪の音が聞こえそうな静かな世界とはひどくかけ離れて、大阪弁が周りに飛びかい、人が道頓堀の壕に飛び降りる音、遠いところから阪神の応援歌が聞こえてくる、ここは静かになる時はないのだと覚りました。もしかすると大阪の雪は大阪人の情熱にとかされたのではないか、だからここは雪が積らないのだ、とも思うようになりました。後に「ラヴレター」の文庫本を読み返してみると、冒頭部に「藤井樹が死んで二年が過ぎた。そして三月三日の三回忌。雛祭のその日、神戸には珍しく雪が降った。高台にある共同墓地も雪の中に埋もれ、喪服の黒にもまだらかな白がまとわりついた」という描写が目に当たりました。なるほど、あの映画は私を欺いたものではないのだ、あの雪はただ「珍しく降った」だけなのだと自分なりに納得しました。このように私は勘違いと思い込みのおかげで、六年間大阪にいることになりました。論文を書きながら阪神を応援してきました。勿論いうまでもなく両方とも

痛みに耐えながらやってきたものです。

研究方法の壁

台湾にいた時には、作品を通して作者を見るのは常識でしたが、日本に来てみると、「作者の死」が宣言され、作品論・テキスト論の時代に変わっていました。テキスト論どころか作品論という言葉さえ聞いたことがなくて心細い思いをしました。私の最初の研究テーマは、「中島敦文学における中国古典の受容」でしたが、調べてみると、中国古典の受容についての研究は私が生まれた年には既に詳しく細かく研究されていました。参加すら間に合いませんでした。また、作品を読むときに、常に生身の作家に還元してしまうので、台湾と日本との研究方法の壁にぶつかったり、遠回りしたりしました。模索時期は一年半かかりました。やっと手に馴染んできたのは修士二年の下半期に入ろうとしたころでした。

しかし、それはあくまで研究への入口に過ぎませんでした。第二の難関は学会発表と雑誌の論文発表でした。博士後期課程に上がってから、学会発表と投稿の話をよく耳にしました。そのような考えや覚悟がまったくなくて、留学生の私には学会で発表することなど出来るはずがないと最初から諦めていました。しかし、自分が留学生だからできないのだと諦めている私を、同級生の方々は、「廖さんは学会発表しないの?」「今度は雑誌の投稿だね」と、一人前の研究者のようにあつかってくれました。早々に諦めようとする自分を恥ずかしく思うようになりました。良い同級生に恵まれて非常に幸せだったと感じています。しかし、やればできるのだと勇気づけられる一方、同級生の姿はあまりも逞く、焦りも強かったことを思い出します。

第三の難関は論文の執筆能力が問われることでした。作品に対する新たな解釈や斬新な発想が最も大事なことだとは思いましたが、いざそれを文字にしようとすると、書けないという現実に躓きました。本当に口惜しくて泣きたくても泣けない状態でした。それを改善するため、「論文用語ノート」のようなものを作りました。積極的に発表を聞き、多くの研究論文を読み、その問題意識の提起方法や、作品の切り口、分析方法を真似て、ノートに書き写し、一からやり直しました。まだまだ下手ですが、最近、すこし感覚を掴めたような気がします。

台湾における日本文学研究の現状について

私の痛みの伴う話はさておき、今回のシンポジウムのテーマを兼ねて、三つの方面から台湾の日本文学研究について述べたいと思います。まず、一つ目は日本文学がどのように研究されてきたの

かについて、二つ目は日本文学の翻訳について、最後に台湾における教育と就職事情について、この三つの方面から報告したいと思います。

周知のように、台湾は日清戦争以来、第二次世界大戦が終るまで五十年にわたる日本の植民地時代を経ているため、母国語として日本語教育を受けた人も多いのですが、実際の文学研究や文学活動に携わる人は少ないと言えます。その理由の一つは、1949年国民党政府が台湾に引き上げてきた後、反日感情のため意識的に日本語・日本文学の人材の養成に努めなかったためと思われます。ところが、日本との貿易関係が頻繁になるにつれ、日本語を駆使できる人材が求められ、それに応じて、図1のように日本語文学関係の学科と講座が相次いで設置されました。

成立時期	国私の別	大学名	大学院の研究方針
1963	私立	中国文化大学	経済、貿易
1966	私立	淡江大学	法律、政治、経済貿易
1969	私立	輔仁大学	日本文学
1972	私立	東呉大学	日本語学、日本語教育
1989	国立	政治大学	設立していない
1994	国立	台湾大学	設立していない

図1　台湾における日本語文学関係の学科

国立大学に日本語文学科が成立されるまでの26年間、日本語、日本文学の研究や人材育成はすべて図1の四つの私立大学によって行われてきました。現在台湾の大学で教鞭を執っている人々の大多数はこの四つの大学出身です。四年制の大学では、基礎教育、共通教育の一環として日本文学史、日本近現代小説鑑賞、日本近代文学概論などの科目は多かれ少なかれカリキュラムに入っています。輔仁大学では、近現代文学にとどまらず、平安朝物語文学研究、日本古典文学など難度の高い古典文学もカリキュラムに入れられています。

次に、台湾における日本文学研究の動向についてですが、90年代初期までの研究状況については、国際日本文化研究センター紀要「日本研究」第10集に掲載された台湾大学の林文月氏の論文が詳しく説明されているため、参照していただければ、おわかりいただけると思います。

それ以後から現在にいたるまでの研究状況について簡単に報告します。台湾には、現在日本文学に関連する学会が三つあります。 それは「台湾日本語文学会」(1989)、「台湾日語教育学会」(1993)、「台湾日本語言文芸研究学会」(1989)です((　)内は設立年)。それぞれ、学会誌や論文集を発行するほか、例会、国際会議の開催も頻繁に行われており、日本語学、日本文学、日本文

化、日本教育といった専門分野の会員や若手研究者にとっての発表の場として重要視されています。これらの学会以外に、各大学も各自に雑誌、研究紀要の発行やシンポジウムの開催に力を入れていますが、枚挙に暇がありませんので省かせていただきます。それらの学会誌や国際会議論文集の執筆者はほとんど大学で日本文学教育に携わる方々ですので、これらの資料を通して、現在台湾の大学でどのような作家、作品が研究対象とされているのかが明らかになると思います。

更に、もう一つ注目に価する動きは、植民地時代の台湾で創作された〈文学〉への関心が高まり、近年盛んに研究されていることです。先ほど簡単に触れましたが、国民政府が1949年台湾に引き上げた当初、政権を保つため台湾的なものを極力否定し、その主な手段は中国語を話すことつまり、国語政策が行われ、日本語、日本の歌、日本映画、漫画などが禁じられるのは勿論ですが、台湾語の使用も抑圧されました。しかし、49年に中国から来た中国人が時代に伴い去っていくにつれ、新世代の政治家は殆ど台湾生まれ、台湾育ちであるため、台湾ナショナリズムが高まってきました。87年戒厳令が解除され、88年初めての台湾生まれの大総統が選出され、そして、2000年3月50年間台湾の政治を支配してきた国民党が野党になり、台湾の本土意識が強くなり、本土化運動も着々と進んできました。長年、抑制されてきた結果、台湾人は中国の歴史、地理、文学に詳しいのに対して普段生活している台湾についてあまりも無知でした。それを改善するためにもう一度台湾を見つめ直そうという動きがでてきました。その延長線に植民地時代に台湾人によって日本語で創作された文学作品をも再検討するようになりました。また、それと呼応するかのように日本での旧植民地の日本語文学への研究も盛んになりました。台湾研究を中心とした「天理台湾学会年報」や「日本台湾学会報」は勿論のことですが、「日本文学」「日本研究」「昭和文学研究」「新日本文学」などの学会誌にも台湾の日本語文学を研究対象とする論文が載せられています。こうした台湾及び日本での台湾日本語文学研究は、今後ますます加熱していくと思われます。

台湾における日本文学作品の翻訳状況および就職事情について

次に、台湾の翻訳事情について述べたいと思います。現在台湾における日本書籍の翻訳は相変わらず近代小説に集中していますが、古典も翻訳されています。図2をご参照ください。

近代小説については、図2に示したように、近代の大家の作品が早くから翻訳されました。しかしながら、これらの小説は日本の伝統文学と思われ、学問的なイメージが持たれがちなため、読者層が限られていることは否めません。そのような局面を突破したのは90年代中頃、台湾を席巻した「春樹ブーム」です。台湾で翻訳、出版された村上春樹の作品は29作にのぼります。読者は日本文学研究者、学習者（日本語文学科、大学院の院生）、日本文学に興味を持つ人々に限らず、日

本や日本文学について興味や基本知識を持たない人々にまで及びました。それに触発されて、日本の現代人気作家の作品も次から次へと翻訳され出版されました。

	作家名	作品名
古典文学		伊勢物語、源氏物語、枕草子、和泉式部日記、徒然草、好色一代男、好色五人女
近代文学	夏目漱石	「こころ」「坊っちゃん」「我が輩は猫である」「三四郎」「それから」「夢十夜」「門」
	森鴎外	「舞姫」「青年」
	芥川龍之介	「羅生門」「地獄變」「或阿呆の一生」「河童」「蜃気楼」「蜜柑」
	菊池寛	「真珠夫人」
	谷崎潤一郎	「細雪」「瘋癲老人日記」
	三島由紀夫	「金閣寺」「禁色」「仮面の告白」「豊饒の海」(「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」)「潮騒」「愛の渇き「美徳のよろめき」
	川端康成	「伊豆の踊子」「雪国」「眠れる美女」「千羽鶴」「古都」「掌の小説」「名人」「山の音」「美しさと哀しみと」
	井上靖	「孔子」「星欄干」
	遠藤周作	「深い河」「侍」「結婚論
	大江健三郎	「死者の奢り」「静かな生活」
	坂口安吾	「白痴」
	太宰治	「人間失格」「斜陽」「女生徒
	中島敦	「山月記」

図2　古典文学・近代小説の代表的な翻訳

図3をみていただければわかるように、翻訳された作品は、ほとんどこれらの作家達の代表作や文学賞受賞作です。そのほかに映画「失楽園」の影響で渡辺淳一の作品もシリーズで翻訳されました。

これらの翻訳作品を概観すれば、初期の翻訳作品は訳者の語学能力によって誤訳が多く見あたりますが、最近、訳者の質が厳しく問われるため、翻訳の質が明らかに向上しました。一方、出版社も読者がより作品を理解できるように、前書で、作者のプロフィールや作品の粗筋、背景説明など色々な工夫をするほか、同じ作者の作品なら同じ訳者に翻訳してもらう方針をとっているようです。昔は、訳者の名前がほとんど本に示されてなかったのに対して、近年出版された本の扉には訳者の履歴が紹介されるようになりました。それにより訳者を読者に紹介する一方、読者カードを

通して訳者の翻訳能力も同時に調査できます。

作者名	作品名
林真理子	「最終便に間に合えば」「葡萄物語」「不機嫌な果実」 「美女入門」「コスメティック」
柳美里	「家族シネマ」「水辺のゆりかご」「タイル」「生」「魂」「男」 「命」「私語辞典」「女学生の友」「家族の標本」「ルージュ」
吉本ばなな	「キッチン」「とかげ」「白河夜船」、「哀しい予感」
山田詠美	「ベッドタイムアイズ」、「風葬の教室」、「ひざまずいて足をお舐め」「トラッシュ」 「放課後の音符」「ぼくは勉強ができない」「4U」「A2Z」「チューイングガム」
江国香織	「神様のボート」「冷静と情熱のあいだ　Rosso」「ぼくの小鳥ちゃん」 「こうばしい日々」「薔薇の木枇杷の木檸檬の木」
小池真理子	「欲望」「恋」「うわさ」「夜ごとの闇の奥底で」「無伴奏」 「やさしい夜の殺意」
村上龍	「限りなく透明に近いブルー」「共生虫」「希望の国のエクソダス」 「ラッフルズホテル」「寂しい国の殺人」

図3　現代作家の代表翻訳

最後に就職事情についてですが、日本経済の不景気や少子化問題で、大学における文科系の再編や解体が迫られる現在、就職難という言葉をよく耳にします。しかし、就職難である現在だからこそ、海外赴任も一つの選択肢として可能になってくると思います。この二三年、日本文学の国際化という流れは破竹の勢いで日本の国文学を席巻しています。西洋、特にアメリカなどの研究方法を導入し、日本文学を世界へ発信しようとする動きは留学生の私でも身近に感じました。今後の日本文学がどのように変っていくのか、台湾の日本文学研究者は日本文学の受発信者の一員として日本の動きに敏感に注目すべきでしょう。しかし、この場を借りて呼びかけたいのは、日本は、西洋、アメリカへ視線を向けると同時に、アジアの国々にも目を配る必要があるということです。今まで日本文学の海外発信、特にアジア地域に向けてのものは殆ど留学生によって行われてきました。しかし、研究水準の上昇、文学教育の経験伝授などの領域においては日本人研究者の参入が望まれています。日本文学の世界への発信の一翼が日本人によって担われる時代が訪れたのだと思います。

〈大阪大学大学院文学研究科　博士後期課程（日本文学）〉

タイにおける日本文学 ── その海路 ──

マッタナー・チャトゥラセンパイロート

私にとって「日本文学」は、黒い海のような未知の世界だった。その闇に惹かれ、船に揺られながら今日に至っている。タイでは、現在では様々な媒体を通して、「日本」は大いに親しまれているが、「日本文学」は、いまだほど遠い存在である。「日本文学」についての一般的な知識の普及は、ほとんどゼロに近いというのが実状で、私と川端康成の出会いも大学の先生が書いた唯一の本によるものであった。日本文学が初めてタイの人々に紹介されたのは、約半世紀前のことである。50年という期間を経て、「日本文学」がいかなる道を辿ってきたのか改めて考える必要があろう。

タイにおける日本語・日本文学の教育の状況

先ずタイにおける日本語・日本文学の教育の状況について述べておきたい。大学レベルの日本語講座は、日本の外務省の寄贈で1965年に初めてタマサート大学で開かれ、続いて翌年1966年にチュラロンコン大学で開講された。選択科目として出発したが、1974年にチュラロンコン大学で専攻科目として日本語コースが誕生した。その後、多くの国立大学でも日本語講座が開設され、1988年にはタイにおける日本語教育機関はおよそ200ほどで、学習者はほぼ4万人近くにも達している。しかしその教育機関の中で、日本語以外の「日本文学」を教えるところは非常に少ない。チュラロンコン大学の日本語講座では、「日本文学史」は必修科目だが、「日本近代文学」は選択科目である(注1)。

現在、大学以外では職業学校や高校でも日本語を教えるところが増えてきた。大学の日本語学科のカリキュラムの中心は日本語であり、言語、文化、社会等専門的な知識を持った教師の数も1960～70年代と比較すれば相当に増えた。しかしながら、学部レベルではやはり実践的な日本語の習得に重点が置かれている。大学院修士課程は1998年のタマサート大学に続き1999年にはチュラロンコン大学にも設置

された。チュラロンコン大学では、1999年～2002年まで13人が日本文学専攻であり、6人が日本語学専攻である。修士論文の一覧を見れば、「伊勢物語におけるレトリカル作法のガイドライン」、「宮川ひろと長崎源之助の児童文学比較研究」、「川端文学における男主人公に関する一考察」などが挙げられる(注2)。資料や参考文献の不足、また専門的な知識を持った指導教官の不足が、研究テーマを限定してしまう要因だと考えられる。チュラロンコン大学では2001年より「日本文学の研究方法」、「謡曲の文芸性と能の演技」、「宮沢賢治からのメッセージ―仏の教えは現代によみがえるのか―」、「川端康成『掌の小説』を読む」等日本からの客員講師による特別公開講演が度々行われている(注3)。専門家の講演を通して、院生の日本語や日本文学研究に対する視野も広がり、これからの研究に大いに役立つと思われる。院生は毎年増加する傾向にあり、日本文学研究の将来は良い方向に向かって発展していくように思われる。

タイ語訳日本文学 ― その実状 ―

タイでは日本文学を知る人が非常に少ないため、日本文学を研究して論文を書いても読者がいない。まず、読める人がいないのである。従って、個別の研究よりも先に日本文学をより多く紹介し、日本文学に触れる機会を増すことが必要だと考えられる。タイ語に翻訳された日本文学はまだ少なく、歴史も浅く50年はたっていない。タイ語に翻訳された日本文学の多くは、近代文学と児童文学であり、また、ほとんどが英語からの重訳である。1960年代～1970年代には、芥川龍之介『羅生門』、川端康成『雪国』、三島由紀夫『潮騒』等といった、所謂、純文学が多く翻訳されている。これらの作品は、英語からの重訳であり、タイの日本文学翻訳の背景には欧米の翻訳事情があり、欧米における日本文学への関心と密接な関係にあると考えられる。一方、1977年より始まった『日本近代文学短編選』第1集から第6集までなど、数少ない日本語から直接翻訳されたものは、一般読者を対象とするのではなく、大学や日本語教育機関の教官及び学生向けのものがほとんどであり、教科書という性格が強い。また、それらは大学出版部や国際交流基金からの出版助成を受けている状況にある。しかも数少ないなかで、例に挙げた『日本近代文学短編選』第3集から第4集の間、実は十年間の空白があり、日本文学の翻訳状況は不定期的なもので、活発ではなかったと言える。翻訳される作品のジャンルも、近代文学がほとんどであり、『源氏物語』や『古今集』、江戸時代の文学などの古典文学作品の翻訳は見当たらない。1979年に『古事記』のタイ語訳が出版されたが、原作の『古事記』から訳したものではなく、タマサート大学の学生達が短編の『古事記物語』から翻訳したものである。現時点では、タイ語に翻訳された日本古典文学はこれ一点しか確認できていない。タイ語訳の日本児童文学の例としては、宮川ひろ『春駒のうた』、『おか

あさんのつうしんぼ』、『先生のつうしんぼ』、黒柳徹子『窓ぎわトットちゃん』、松谷みよ子『ふたりのイーダ』、『ちいさいモモちゃん』、長崎源之助『人魚がくれたさくら貝』などがある。その他に、ミステリー小説の方も多少翻訳され、とくに江戸川乱歩の作品が多い(注4)。

日本文学の新たな「波」

欧米文学と比べ、日本文学のタイ語訳はまだ少ない。その原因は、第一に、日本語の言語能力、日本の独特な文化・思想・感覚レベルなどについて十分な理解力を持つ翻訳家が少ないとため考えられる。第二に、著作権の問題があるため、翻訳作品が限られてくる、といった外面的な要因も考えられるが、内容面についても、筋書きの大胆な変化よりも人間内部を描くことを中心とした作品は、タイの読者には理解しづらいところがあり、受け入れられにくい傾向にある。それは、翻訳側の日本文化・文学に対する理解不足が大きく関連し、読者側に「伝わらない」結果となると推測できよう(注5)。

しかしながら、ここ数年の「日本ブーム」現象のなか、タイでの日本文学翻訳に対する新たな「波」が起こっている。吉本ばなな、村上春樹、江国香織、辻仁成、など1980年以降に活躍しはじめた現代作家の作品が相次いで紹介され、一般読者の間で話題になっている。現代作家の作品の翻訳は、吉本ばななの『キッチン』をはじめ、村上春樹の『風の歌を聴け』『羊をめぐる冒険』『1973年のピンボール』など、英語からの重訳の系列と、江国香織『きらきらひかる』、辻仁成・江国香織の『冷静と情熱のあいだ』といった日本語からの直接の翻訳との二系列がある。刊行部数が3000～5000部に昇り、8000部までベストセラーになった作品もあり、現代日本文学への関心が非常に高まっていることが反映されている。現代小説のみではなく、夏目漱石『吾輩は猫である』、小熊秀雄『焼かれた魚』など、時代を問わず幅広く紹介されている。川端康成『山の音』『雪国』や芥川龍之介『河童』や夏目漱石『こころ』など、以前出版したものが次々と再版され、日本文学作品が注目されていることが分かる。

こうした「波」は世界的な流行による偶然の結果だと言われ、いつか消えてしまうのではないかという懸念の声がある。しかしこの「波」は「偶然」ではなく、時代が生む「自然」な流れだと思われる。同時代に生きるものは、異なった言葉や社会や人間に対して興味を示し、そのなかで自己を追い求める。タイにおける日本文学は、単なる「現象」から「実体」へと固まり、その「本質」に近づきつつあると思われる。日本文学の紹介から、日本文学のあり方への真の理解が深まり、さらに本格的な日本文学研究へと進んでいく。黒い海から透明な海へと変貌するまで、これから大いに努力が必要であろう。

日本文学の世界 ── 個人研究を通じて──

今日、日・タイの文化交流は成長期にあり、ことに日本文学を通じてより深い接点を掘り下げるべきであろう。現段階でも、日本文学が次々と翻訳され紹介されており、タイの読者における日本文学への関心が増していることは確かである。しかしそうしたなかで、どれほどに日本文学を理解できるのかという点には疑問が残る。私自身は、『眠れる美女』や『片腕』など川端康成の晩年作品に注目し、とくに川端文学における「性」の様相を研究テーマとして考察を行っているが、口頭発表の場で「なぜこの作品を選んだのですか」というような素朴な質問に対しても、いつも戸惑いを覚える。作品の「なにか」に惹かれているという漠然とした答えは確かにあるのだが、その「なにか」を自分の言葉にできないからである。文学研究にあたってそれは根本的な問いであり、そういった問いを念頭に置きながら作品内の言葉を凝視すると同時に、その「なにか」を繰り返しみつめ自分の言葉で表現することだと教えられる。「自分のことば」は、眼前にある言語表現の壁を越えた最も自分の感覚に近いところにあり、より忠実に近づけることに大きな意味があると思われる。山本健吉氏は川端文学についてこのように言っている。「氏が死んだ古賀春江の絵について言った、「なにかしら遠いあこがれと、ほのぼのとむなしい広がり」と言ったようなものだ。これを川端文学根本にある動因とすれば、それを現す「なにかしら」とか「ほのぼの」とかいった語彙は、三島の辞書にはないのである」。捉えがたいものをどう言葉に現して書いたらよいか、という作家の作業は留学生にとっての日本文学研究に通ずるものがあるのではないかと思う。日本文学研究を通して学んできたものをより一人でも多く伝え、日本文学の世界、その本質により近づける方向に力を注ぐことが私にとってのこれからの課題である。

〈大阪大学大学院文学研究科　博士後期課程（日本文学）〉

---

1 ──── カンラヤニー・シタスワン「タイ語訳の日本文学」『境界と日本文学ー翻訳とその週辺』（国文学研究資料館・1999）から要約したものである。

2 ──── チュラロンコン大学ホームページhttp://www.arts.chula.ac.th/~japan/graduate.html(2003年3月現在）に基づいたものである。

3 ──── 注2に同じ。

4 ──── チョーティカプラカーイ・アッタヤ、チャトゥラセンパイロート・マッタナー「タイにおける日本文学」（詞林 第28号2000・10）

5 ──── 注4に同じ。

古典文学と翻訳

テレサ・マルティネス・フェルナンデス

今回のシンポジウムは、「留学生にとっての日本文学研究」という副題のあるテーマですので、まず、私がどのようにして日本に留学生として来ることになったのか、その経緯をお話しして、その後で、翻訳に対する私の意見を述べていきたいと思います。

日本文学との出会い・スペインにおける日本文学研究の現状

数年前に、私は、日本語の勉強を始めました。きっかけは、漢字に興味を持ったことです。日本語を学ぶ前には、少しだけですが、中国語も勉強していました。日本語を学ぶうちに、私の中で、日本文学に対する興味が高まっていきました。もともと、私は、文学に対して、より正確に言えば「読む」ことに対して、興味を持っていました。私にとって、言語を学ぶということは、その言語で書かれた作品を読むことに対する準備なのです。しかし、その準備には時間がかかりますから、とりあえずは、読みたいと思った日本語で書かれた作品の翻訳を読むことから始めました。

最初に、言っておかなければならないのは、私にとっての日本文学とは、主に『源氏物語』であるということです。私は、日本文学全般については、あまり詳しくはありませんが、私が読みたいものがなにかはわかっています。それは、すなわち、『源氏物語』、そして、それに関連する作品、たとえば、『紫式部日記』や、同時代の女流日記、あるいは男性貴族の漢文日記、また『源氏物語』以前の物語作品や歌集、さらに『古事記』や『日本書紀』などまでをも含む、多くの作品です。『源氏物語』とは、私にとっては、日本文学を照らし出す光であり、『源氏物語』の導きによって、私は、日本文学を知ることができたのです。

私が初めて『源氏物語』という名前を聞いたのは、大学に入った頃でした。ある友人が—その人自身は『源氏物語』を読んだことはなかったのですが—、『源氏物語』とは、プルーストの『失われた時を求めて』に匹敵する作品であり、その作者は女性である、と何かに書かれていたと教えてくれたのです。友人から聞かされた『源氏物語』の名前は、私の心に留まりましたが、それは、『失われた時を求めて』に匹敵するという評価によってではありません。実は、そのとき、私は、日本語の勉強を始めたところだったのです。日本語で書かれた文学作品として、『源氏物語』という名前は、

私にとても強い印象を残しました。その後、日本語の教室で、紫式部とその作品についての短い説明を受けましたが、その説明の内容は、日本の有名な古典作品について、少なくとも名前だけは押さえておくようにというものでした。

私は、実際には『源氏物語』はまだ読んでいませんでしたし、方法論的にも不十分なまま、間接的な手段ではありますが、『源氏物語』について書かれた論文などを読み始めました。結果は、まるで、知らない人々の会話を途中から断片だけ聞いているようでした。しかし、だからこそ、『源氏物語』をもっと知りたいという私の欲求はますます大きくなり、その後、『源氏物語』の英訳版を読み進め、読破しました。さらに、続けて関連する他作品も読み進め、もっと『源氏物語』を深く知り、読むために、どこか他の場所へ行かなければ、と決心しました。実は、当時、スペインの大学では、日本文学を専攻することはできませんでした。今でも、スペインの大学の日本文学講座は充実しているとは言い難い状況です。私の母校・マドリードの自治大学では、この秋から、日本の文化や歴史などを総合的に学ぶ2年間の講座が開設されるようですが、日本文学だけの講座はまだ開設される予定はないようです。つまり、『源氏物語』をより深く読みたいという私の願いは、スペインでは叶えることができなかったのです。私は、まず、イギリスに行き、ロンドン大学の修士課程で1年間学び、『源氏物語』についての修士論文を書きました。ロンドン大学は、日本に関する様々な講座が開設されており、とても刺激的な環境でしたが、私の「『源氏物語』を読む」という目的を本格的に果たすためには、やはり、日本に行かなければならないと思い、覚悟を決め、去年、大阪大学にやってきたというわけです。

スペインにおける日本文学の翻訳状況

『源氏物語』のスペイン語の翻訳はまだありません。ですから、私は、時々、スペイン語訳をするつもりはありますか?と聞かれることがあります。もし私が翻訳をしたらどのくらい時間がかかるだろうかと想像してみたのですが、かなり長くかかることは間違いないでしょう。しかし、私にとって、翻訳自体は目的ではありません。私の立場は、基本的に1人の「読者」ですから、私にとっての翻訳とは、『源氏物語』を読み、そして研究してきたプロセスの結果、そこに付随する要素のひとつにすぎないと思います。大変複雑な『源氏物語』という作品を、言語的にも文化的にもまったく違う、距離的にも時間的にも離れた、スペイン語に翻訳するということは、もちろん、大変困難なことですが、もし、翻訳するとしたら、先行するいくつかの他言語の翻訳書が模範となってくれることでしょう。

私の『源氏物語』の翻訳はまだまだ先の話ですが、近年、スペインにおいて、日本文学は、少し

ずつですが、翻訳・出版されるようになってきています。それは、ユネスコによる世界文学の翻訳推進活動によるところが大きいと言えます。現在、スペインで手に入る日本文学の翻訳書は、『竹取物語』、『伊勢物語』、『風姿花伝』、『好色一代男』、『雨月物語』、『吾輩は猫である』などです。また、『古今集』の百首を抄訳したものも、近いうちに出版される予定です。

翻訳と読者

ウォルター・ベンヤミンは、『翻訳者の課題』というエッセイの中で、翻訳を試みるとき、読者に対する配慮は不必要であり、そのような配慮こそが翻訳を陳腐にするのである、なにより、原典には読者に対する配慮などないのだ、と述べています。

翻訳の読者は、文化的に遠い国の作品の場合は特に、ちょっとでもわからない箇所や予想できない箇所があると、それに対処する手段や能力がなく、作品そのものに対する興味を失ってしまうものと仮定されています。古典作品の翻訳を読む読者とは、その大多数が、自分にとって少しでも馴染みのないものに出くわすと、途端に本を投げ出す人々と考えられているのです。どういうわけか、翻訳作品の読者には、母国語の文学を読む際にも充分考えられる危険性にさらされることが許されていないと言えるでしょう。おそらくは、実際よりも、読者は無能で無関心なものと仮定され、また、規定されているのです。

私たちは、本を選ぶときに、新聞や雑誌の書評などから情報を得ます。しかし、翻訳書の場合は、国によって違いはありますが、自国の出版物と同じようには扱われません。たとえば、スペインやイギリスの新聞の書評で、フランスの新刊は、まだ翻訳されていないものも含め、取り上げられることはありますが、日本の新刊および他国で出版された日本に関する新刊は、ほとんど取り上げられることはありません。これは、スペインやイギリスにおいて、フランス語を話せる人が日本語を話せる人より多い、という理由だけでは片づけられないと思います。どの国の本を翻訳するのか、どの程度の種類の本を翻訳するのか、一般の人々にどのような方法で紹介するのか、どのくらい力を入れて紹介するのか、という翻訳活動に関わる様々な問題は、文化的・政治的な暗黙の指針によって定められているのです。一般読者が、翻訳書を読むときに、障害となるのは、原文の表現や特色を表すために付けられた脚注ではありません。研究者や出版業界や評

論家たちの、原典の文化と一般読者に対する認識の仕方に問題があるのです。

研究者や学生を別にすれば、注釈や解説のない古典作品の翻訳書は、その作品そのもの、また、原語における読者と作品の関係を、ある意味で、誤って伝えることになります。たとえば、『源氏物語』の英訳書の読者は、辞書を使わなくても、最初から最後まで読むことができます。それに対して、日本人の読者は、古語辞典を使わないと、『源氏物語』を読み始めることさえできません。『源氏物語』は長編作品なので、出版の際に特別な問題点があるとは思いますが、たとえば、日本人が『源氏物語』を読むときに、注釈の付いたテキストや現代語訳やダイジェスト版などの中から自由に選べるように、翻訳書も、様々な形で出版されるべきだと思います。翻訳書すべてをわかりやすい形にする必要はないでしょう。もちろん、どんな時代の作品であれ、翻訳は、現代語でしかすることができません。しかし、重要なのは、文章そのものではなく、読者の前にどのような形で提出されるかということなのです。翻訳書の形式が、読者に与える原典の印象を左右すると言えるでしょう。

他国の古典と自国の古典

ロンドン大学で受けた最初の授業で、私は、ある文芸批評家の書いた、オデッセイと旧約聖書をいくつかの観点で比較した論文を読まなければなりませんでした。そのとき、その論文と一緒に、古文のテキストも配られました。もちろん、オデッセイは古代ギリシャ語で、旧約聖書は古代ヘブライ語で書かれていました。現在の西洋文化の源泉と考えられている、この2つの基礎的なテキストを、クラスの誰もが読むことができませんでした。この2つのテキストが、西洋文化の基盤であり、源泉であり、完璧に理解できうるものであるということを疑う人はいません。しかし、実際には、これらのテキストを私たちは読むことができなかったのです。

古典は、古代から何世紀にもわたって、繰り返し翻訳され、その当時のことばに直され、時代時代に適応してきました。その結果、不可解さは隠れ、連続性が生じ、文化的な基礎が固められてきたのです。しかし、地理的・言語的・民族的に連続性がある場合でさえ、その文化の源泉と、現在の発展した文化の形とは、かなり異質なものであることは認識されなければならないでしょう。現在の西洋人にとって、古代ギリシャ・ローマあるいは中東の文学作品との距離は、近くて連続性があるものと捉えられがちです。しかし、その距離は、実際には、今日の西洋と、日本の古典作品の世界との距離と、おそらく、それほど違わないでしょう。

自国の古典は理解できて当然であり、他国の古典は理解できるはずがない、という感覚は、ある程度は避けられないとは思いますが、少なくとも、自国の古典と他国の古典にそれほど差はない

ということを認識することが大切だと思います。そのためには、やはり、翻訳者の力が必要なのです。

以上、スペインの現状や私自身の経験を踏まえつつ、翻訳、特に古典作品の翻訳について、私の考えを述べてきました。今まで述べてきた私の意見は、日本文学を研究することがなかったら、思い浮かばなかったものかもしれません。私にとって、日本文学とは、日本を知る手がかりになるだけではなく、様々なことを思い起こさせる力なのです。それが、私にとっての、日本文学の魅力なのかもしれません。

〈大阪大学大学院文学研究科　外国人客員研究員（日本文学）〉

カジュアル・ソーセージ、コーンぬき

ジャック・ストーンマン

私の家の近くにあるシカゴピザというピザ屋のメニューに、「カジュアル・ソーセージ」というピザがあります。一見すると普通のピザのように見えますが、チーズやソーセージの他にコーンがのっています。私は何年か前から、この日本のピザのコーンのことで悩んできました。「何でコーンをピザにのせるのだろう」と。結局、親しい日本人の友達にこの悩みを打ち明けることにしました。「なぜ日本のピザ屋さんはコーンをのせるんですか?」と聞くと、「何、アメリカでそうするからさ」と言われました。かなりのショックでした。私はピザ研究者ではないので詳しいことはわからないのですが、私の知る範囲では、アメリカのピザの舞台にコーンは絶対に登場しません。国際交流にこのような誤解はたまに生じます。

コーンは確かにアメリカを代表する食料のひとつであって、ピザというアメリカから渡って来た食べ物に、日本のピザ屋さんが、いかにもアメリカ的なコーンをのせるのも、自然な発想であると思います。しかし、アメリカのピザ屋さんはコーンをのせません。では、これは、ピザ翻訳のミスなのでしょうか?

なお、「カジュアル・ソーセージ」という名前も問題です。カタカナで読むとなんとなく日本で言うカジュアルの意味がソーセージに通じるような感じがしますが、英語では“casual”という形容詞が“sausage”という名詞につくことは、あり得ないとまではいえないものの、とにかく考えにくいことです。ですから、これは翻訳のレベルを超えた文化のレベルでのミスといえましょう。

今回のシンポジウムのテーマは「日本文学の魅力 — 留学生にとっての日本文学の研究」であるのに、ピザの話では申し訳ないと思っておりますが、しかし、このカジュアル・ソーセージというピザにも日本文学の研究や翻訳に関する主な問題点がそろっていると、私は思います。では、その一つを検討してみましょう。

私達外国人が日本の文学を翻訳する場合、言葉だけではなく、文化も何とかして伝えていく必要があります。文化の翻訳といえば良いでしょうか。もちろん、文学あるいは言葉そのものによってこそ、文化は訳されるのですが、その場合、言葉と文化の間には微妙な調整が行われていると思います。

たとえば、ドナルド・キーン先生はこんな話をしてくださいました。ある小説を翻訳されている

時のことです。ある女性が足袋を履く姿を見て、鑑賞というか、主人公が興奮をする場面があり、先生は、「足袋」をどう訳したらいいだろうと悩まれたそうです。そして、悩んだ挙句、先生は昔のアメリカやヨーロッパのお嬢様が使うような長くて白い手袋、“white gloves”と訳しました。それで、満足されたようですが、結局それでは読者をごまかす結果になったとおもいます。無論、先生は小説のその場面の奇妙な雰囲気をこわすことを恐れて、さらには、注釈も嫌ってそのような翻訳に決めたのだとおもいますが、こういう場合には言葉以上に文化そのものが問題となります。アメリカにはもちろん足袋はありませんが、主人公が足袋を履いている女性を見て興奮する、いわゆるフット・フェティシュのシーンは、どんな読者でも十分理解できると思います。それなのに、それがただの“white gloves”となると、そのシーンの雰囲気を保つかというと、逆にその妙なフェティシュの余情はうしなわれます。先生は初心者の読者を想って翻訳されたのでしょうが、初心者向きの翻訳こそ、翻訳者は素直に言葉通りに翻訳するべきだと私は思います。

たとえば、サイデンスティッカー先生は次のようにおっしゃっているようです。「アメリカ人が源氏物語を読むとき、登場人物が絶えず涙を流していると誤解しないように、あまりに多い涙の表現やシーンを20％ぐらいカットしました」と。 これも初心者の読者を思いやった決断ですが、 やはり読者をごまかす結果ももたらすと思います。つまり、「源氏物語のキャラクターがあまりに泣き過ぎるとアメリカの読者に具合が悪い」という発想と、「アメリカ人はよくコーンを食べるからピザのトッピングにしよう」という発想は、そう遠いことではないのです。どちらにしても言葉をこえた文化の翻訳の問題なのです。

オリエンタリズムの論理によれば、オリエント、すなわち東洋に，西洋人が何かエキゾティックなものを見出して関心を持つようになるといいますが、これは東洋だけではなく、どんな国でもそうだとおもいますが、私達は異国の文化や文学に触れると、根本的なレベルで、何か人間的な共通点を感じながらも、エキゾティックな点にこそ、私達の目は強く向けられるものだと想います。これは初心者の読者であっても、偉い研究者であっても同じことだと思います。つまり異国の文化を味わう楽しさは、この人間的な共通点と、文化的なエキゾティシズムの結合だと思うのです。

たとえば、先の足袋の例でもそうです。美しい女性が着替えているエロティックなシーンのよさは、どんな国の人でもわかるとおもうのですが、それが足袋ではなく手袋になると、日本文学として

の面白さは成り立たなくなってしまいます。アメリカの読者は、“white gloves”に違和感を感じて初めて、エキゾティックな点を味わうことが出来、そして、日本の文化とのふれあいができるのだと思います。たとえ，足袋を説明する注をつけなければならないにしても、それは小説のシーンの雰囲気をこわすことにはならないでしょう。却ってそのシーンの良さや、日本の文化の一点をより理解できるように読者を助けることになると思います。

かなり心理的な話になってしまいましたが、このように、翻訳をするときは、常に文化の翻訳ということと、読者の異文化とのふれあいの精神的構造や契機ということも、念頭におかなければならないとおもいます。

この問題を考えるうえで、役に立つ一つの翻訳分野は和歌です。和歌は独特な世界を有している文学作品です。和歌の伝統的な詞や表現、あるいは歌人が共有している詞と意味の蓄積がわからなければどんなシンプルな歌であっても、歌の本当の意味やよさは、理解しにくいのです。しかし、一首の余情や、インターテキスチュアリティとして持っている意味や、イメージを全部翻訳によって表そうとすると、めちゃくちゃになってしまうケースがあります。具体的に見てみましょう。

私は西行法師を研究していますので西行の歌を例に説明いたします。

そらになる心ははるのかすみにて世にあらじともおもひたつかな（山家集786）

私の翻訳は次のとおりです。

The empty sky
of my heart
shrouded by spring mist
rising thoughts of
leaving the world behind　　（Sankashū, 786）

この歌の詞を読むと日本語でも英語でもなんとなく雰囲気がわかるような気がします。ただし、確かにぼんやりした歌です。“empty sky of my heart”は詞どおりに理解できますが、やはり何かもっと深い意味がありそうに思われるような表現になっていると思います。日本語でもそうです。「そらになるこころ」は西行の歌によくある表現で、二重の意味を持ちます。ご存知のように「そら」は天空の空でも、佛教でいう空（くう）でもあります。この知識なしにこの歌の心を理解することはできな

いのですが、翻訳ではどうしたらいいでしょうか？ WilliamLaFleur氏は次のようにこの「そらになる心」の歌を翻訳しています。

A man with his mind
At one with the sky-void steps
Into a spring mist
And begins to wonder if he might
Have just stepped out of the world. （Diss., p.248）

映画のシーンのように視覚的に描いた翻訳になっています。読んでみてとても面白いのですが、西行の歌とはかなり隔たった世界になっていると思います。LaFleur氏は「そら」という二重の意味をもつ詞をそのままハイフンを使って表現しています。しかし、本文は、「そら」を簡単に片づけない。しかも“sky-void”というむずかしい佛教用語をぽつんと置いてもいいのでしょうか。この訳で文化の微妙な調整をしているのだと思います。というのは、LaFleur氏は詞もその詞の持つ文化、あるいは、佛教の思想をも全部“sky-void”に求めているのです。しかし、そう訳しすぎなくても、読者は、「そら」という詞の持つ和歌的表現や仏教的な意味、余情、などを前もって理解していない読者でも、注釈がついていればすぐにわかるはずです。和歌というものは、一遍読んですべてがわかる文学作品ではないのですから、翻訳にも注がついて当然だとおもいます。そうしないと全てが翻訳の言葉に求められて、読みすぎた、想像しすぎた、説明しすぎた、ややこしい英語の歌ができてしまいます。今まで、翻訳にあまり注をつけない傾向がずっと続いてきましたが、注釈の役割や使い方を考え直す時期にあると私は思います。

とにかく、この歌には、「そら」という大切な文学的、かつ文化的なNEXUSがあります。NEXUSというのはご存知のように、連鎖するリンクとリンクの間にある大切なつなぎ、あるいは接合といった意味です。文学作品におけるNEXUSにはその作品の一番大事な意味が存在することはよくあります。これは日本語でも、英語でも同じです。例の西行の歌の意味的なNEXUSと言えば、「そら」と「かすみ」です。「そら」と「かすみ」におけるイメージやもっと深い意味や連想はこの一首にとって大事な役割を占めています。ですから日本語から英語に翻訳するとき、そのNEXUSに存在する大切な文学的・文化的な意味をなくしたり、ごまかしたり、混乱させたりすることは、なるべく避けたほうがいいのですが、NEXUSになる言葉や表現、あるいは小説の場面などは、よく翻訳によってその大事な文学的な意味や文化的な役割を失ってしまいがちです。というのは、NEXUS

になるところは翻訳し難いのです。文学的・文化的なイメージ・意味や特殊な用語・掛詞などが濃くなれば濃くなるほど翻訳しにくくなると思います。ですから翻訳者は直訳をあきらめたり、本文から遠ざかったりしてしまいます。読者に違和感を感じさせないということで、逆に大切な文学・文化の意味のNEXUSを犠牲にする翻訳は多いと思います。むしろ、多少の違和感を恐れず、そして注釈というものも嫌わず翻訳すれば、読者が十分に興味を持つようになる翻訳、そして同時に読んでよくわかる翻訳もできあがるのではないでしょうか。

〈コロンビア大学大学院　大阪大学大学院文学研究科 大学院研究生（日本文学）〉

柳宗悦の朝鮮芸術論 ── 韓国人による評価の概観 ──

金容菊

日本近代の民芸学者であり思想家である柳宗悦（1889～1961、以下‘柳’とする）と朝鮮との直接的な出会いは、1916年の朝鮮旅行から始まる。この旅行は、1914年5月自宅に訪れた淺川伯教が土産として贈った朝鮮の壺から受けた強い感動が一因だったという。そもそも西洋思考だった柳の思想研究は、この朝鮮旅行を契機に東洋へと転換され、民衆的芸術に対する美論が作り出され始めたのである。

さて1919年『藝術』6月号に発表した「石仏寺彫刻に就て」をはじめとする朝鮮に関する柳の80編余りの文章は、植民地であった当時から現在まで韓国美術史の中で様々な議論の対象として取り上げられてきた。

第2次大戦直後からの韓国での美術史に関する研究は、南北分断と韓国戦争（朝鮮戦争）によって1950年代を通じ、発展的につながることはなかった。従って、この期間の研究は皆無であり、あったとしても戦時の混乱のために散逸してしまったと思われる。このような韓国美術史の研究が1950年代の空白の状態から進展し始めたのは1960年代に達してからである。

1960年代の初め、歴史意識と民族意識の高揚により台頭した植民地史観の本格的な克服と民族主義的史観の確立が目指された時代的状況の下で、柳の朝鮮芸術論に対する関心は高まっていった。議論の焦点は‘悲哀美論’に対するものであり、つまりこの時期、‘悲哀美論’こそが柳の朝鮮芸術論の中心的な内容として認識されていた。そして1960年代から‘悲哀美論’を中心に始まった柳の朝鮮芸術論に対する韓国人研究者たちの批判が本格的な展開を見せたのは、1970年代であった。

1970年代における柳の‘悲哀美論’に対する批判は、文芸批評家である崔夏林の『朝鮮とその芸術』の韓国語翻訳本の「解説」から始まる。ここで崔は柳の悲哀美論が根拠としている歴史認識の問題を提起している。不幸な韓国の近代史だけで韓国の特質を決めつけたり、「不運が悲哀の感情を生み出す」という柳の考え方は危険であると述べ、柳の持つ観念性を指摘している。(注1)

以後、崔の批判と同様の見解が、1970年代の民族意識の高調と共に相次ぐのである。美術史学者である文明大は、「柳の立場は主人が下人を同情するそれにすぎない。彼の立場は、当時の日本官学者たちの植民地史観と少しの違いも見出すことができない」といい、日本の同化政策に

同調するような柳の論考を酷評した。(注2)

また、在日韓国人の民族学者である金両基も論文「柳宗悦の〈韓国の美〉」の中で、柳の‘悲哀美論’を批判し、(注3)また1977年9月『新東亞』に発表した論文「韓国の美は、悲哀の美なのか柳宗悦の定説は直されるべきである」では、‘悲哀の美’の発展的な批判、再検討をしていない韓国文化界の現実に対しても、「悲哀の美を看過していることは日鮮同祖論による差別的歴史観をそのまま是認しているという論理が成立することである」と指摘した。

しかし、この時期の韓国美術史の研究は、当時の歴史学者たちにより提起された植民主義史観の克服と民族意識の高揚という目的意識によって、韓国美術史の実状の正確・客観的な把握に一定の限界を設けられてしまっていたと言える。そして1981年1月、筑摩書房から出版された『柳宗悦全集』第6巻が韓国で翻訳され始めると、柳の論理を学問的な関心から客観的・多角的に再検討しようとする新しい動きが美学・美術史学者の間に見え始める。それは、韓国の学界に‘悲哀美論’よりも根本的な影響を与えたと思われる1930年代以後の柳の朝鮮に関する論文や民芸論に対する学問的な再評価を試みるものであった。

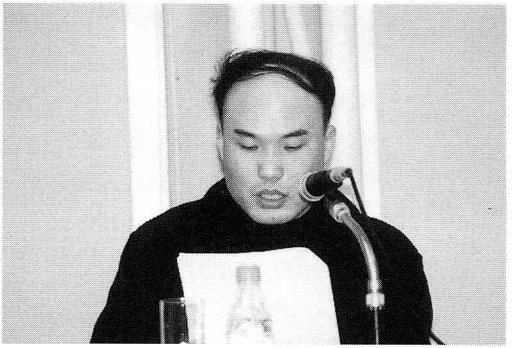
まず、1980年代前半の論考を見ると、柳の思想の普遍性を支持する立場のものが多い。その1つが、徐壬寿の論文「博物館と光化門と文化的空間」である。(注4)

また宗教思想家である金容雲も近代化に関わる根本的な問題に触れながら、柳の思想を取り上げている。(注5)1980年代後半になると、韓国の民族文化全般についても学術的に考察しようとする動きが表われるが、ここにおいても柳の朝鮮芸術論は頻繁に取り上げられるのである。韓国美術史研究者である趙善美は、それまでの柳に対する解釈の偏狭さを指摘しながら、「柳宗悦の韓国美術観をどこまで受け入れ、また批判するかは彼の美術観の全貌を正しく認識した上で行なうもの」(注6)であると前提しながら、1920年代半ば以降の柳の韓国美術観から表われる変化に注目している。そして柳の朝鮮芸術論を「欠点はあるが、韓国美術史に関する議論の土台となる注目すべきもの」であると評価する。

こういう柳評価は、1990年代に入ると民芸論の方へ続いていく。例えば、同じく美術史学者である権寧弼は、柳の民芸論について、「韓国美術学史において、柳宗悦の理論ほど問題点を持っている事例も珍しいだろう。[中略]要するに、彼の末期に台頭した「民芸」の概念は、新しいジャンルを開拓しただけでなく、それを通して、また違った東洋の美的理想がよみがえったのは、否定できないこと」(注7)であると評価し、1970・80年代に形成された柳批判を「歴史解釈の国粋主義的立場」であると指摘した。このような権の文章は、柳の朝鮮芸術論と向かい合う際における客観性といったものを感じさせる。

また、同じく沈雨晟も「〈柳宗悦〉の韓国美論」という論文の中で、「いまや彼[柳宗悦:引用者

注］の韓国美論を断片的な批評の形式で罵倒したり讃揚したりする時期は過ぎ去ったと考える。客観的な立場から多角的に再検討・再評価しなければならない」(注8)



と述べ、これからの柳評価の立場を、初期の‘悲哀美論’に止まらず、後の民芸論との延長線上で取り上げていくことを力説している。

このように韓国人研究者たちの柳の朝鮮芸術論に関する評価は、1960年代の植民地史観の克服や1970・80年代の教科書問題、1988年ソウル・オリンピック後の韓国美術学界の意識変化などの時代的な背景とともに変化してきたのである。

ところが、こういう柳の朝鮮芸術論に対する評価の変化の中で唯一民画の事に関しては、徹底して批判的な立場が一貫している。柳の民画に対する関心の始まりは日本の大津絵からである。大津絵を通して民画を定義した柳は、1957年11月発行の『民藝』59号に、〈蓮と蟹〉と名づけた絵の原色版を掲載し、「朝鮮画を眺めて」と題した文を付した。これが柳による朝鮮民画についての最初の文書である。また1959年8月の『民藝』80号には、「不思議な朝鮮民画」と挿絵解説である「朝鮮の民画」という文章を執筆したのである。そしてこの時初めて柳は、朝鮮の民衆的絵画―柳の言い方を借りると―を日本の大津絵と同じく〈民画〉という言葉で表記したのである。

しかしこうした柳の見解は、韓国で民画に関する研究が進むにつれ、大きな柳批判の的になるのである。日本と韓国の民画の違いをいち早く整理したのは、在日韓国人研究者の李禹煥である。李は著書『李朝の民画―構造としての絵画―』(講談社、1977年)で韓日の民画を対比し、その大きな違いを2つに絞って整理した。1つは民画製作者に関する違いである。両者とも様式化されているのにもかかわらず、朝鮮の民画は製作者が個人的な単位であり職業性を持っていなくて全国的な範囲で活動したのに対し、日本の民画は工房単位の製作であり職業性を持つ地方的なものだったのである。もう1つは需要に関する違いである。これは製作者のこととも関わるが、朝鮮の民画は柳のいう民衆だけでなく王座の後ろを飾る(屏風―朝鮮時代の王宮である景福宮の勤政殿にある「五峰屏」は有名である―にいたるまで、その需要層は幅広かったのである。李はこれら)2つの大きな違いについて気づいていなかった柳の朝鮮の民画についての勉強不足を指摘した。

このように朝鮮の民画は宮中から民間にまで、人々の生活の中でさまざまな形で使われた実用的な絵画である。しかし日常生活や行事などで装飾用として民画を使うという風習は、近代化による生活様式と家屋構造の急激な変化とともに、韓国人の日常生活の中から消えてしまった。した

がってそれを製作する者も自然に少なくなり、朝鮮の民画はだんだん退歩して行ったのである。

ところで柳没後、柳民芸論の影響を受け1960年代から始まった韓国人による民画研究と1970年代に起こった民藝ブームとともに、民画の製作は再び活発になり始めたのである。現在は韓国民画協会、民画作家協会など幾つかの団体が民画の再現や創作、また展覧会や講座による民画の正しい認識と普及を目標に活動している。そして政府からも民芸品製作者への保護・支援政策が設けられることになり、金萬熙のような'ソウル特別市無形文化財第18号'という民画匠が誕生することにもなった。

このようなきっかけを通して、これまで民画に対し冷笑的な反応を示してきた韓国美術界やまだ低い国民的な認識に変化が見えてくることを期待したいと思う。

以上、柳の朝鮮芸術論に対する韓国人研究者たちによる評価を概観してみた。そしてその評価は、柳の初期の'悲哀美論'への徹底的な批判を踏まえた上で、後期の民芸論への客観的・学問的な評価への変化という形を取っていることがわかった。また一貫して徹底した批判の立場を取ってきた柳の民画論への評価からも、柳の影響による民画の再認識という面での業績については認めていることが伺える。このようにこれからの柳美論は、韓国の現代美術の流れとともに再び変化を見せていくことであろう。さらに芸術だけでなく、柳の思想的な部分もより具体的に細分化され、議論されていくだろう。私はこれからも、このような柳美論に対するさまざまな議論の検討を通して、韓国の民衆文化のあり方を探っていきたいと思う。

〈大阪大学大学院文学研究科　博士後期課程(日本学)〉

---

1 ――――崔夏林「解説柳宗悦의韓国美術観에대하여」、柳宗悦著/李大源訳『韓国과그芸術』知識産業社1974년6월

2 ――――'白の似合う風土、それが韓国だ。そこに白をこよなく愛してきた民族が住んでいる。白を多用してきたことから、白衣民族ともよび、それを誇りにしてきた。[中略]日本人柳宗悦の目には、その白が喪服の白として、悲哀の白としてうつった。度重なる外敵の侵入で、希望と喜びをうばわれた民族が、その心情を白に託したと洞察した。[中略]韓国の美を「悲哀の美」とする柳宗悦の見解は、明らかに誤認だ。それは美の認識において大変大きな間違いだった。にもかかわらず、柳宗悦の善なる心はたたえられ、信じられてきた。'(文明大「1930年代の美術学振興運動」『民族文化研究』1977年12月号、p.147)

3 ――――金両基「柳宗悦の〈韓国の美〉」『朝日新聞』1977年1月26日夕刊

4 ――――'総督府建築のため、光化門が取り壊されようとした時、日本人柳宗悦は、その不当性を痛烈に糾弾した。[中略]この光化門が再建されるというニュースが伝えられたとき、私の脳裏に何よりも先に浮かんだのは、今は他国民となった、この柳宗悦の文章だった。それはそれ自体として、うかがう余地のない卓見であり、良心の声であった。'(徐壬寿「博物館과光化門과文化의空間」、『月刊朝鮮』1982년6월호、p.388)

5 ――――'暗い植民地時代の韓国芸術を深く理解し、それらを作り出した韓民族の独立を精神的に支援した日本人・柳宗悦は、日本が隣国を理解し、彼らに尊敬と愛情を持つための道は、ひとえに宗教と芸術の内面世界の理解にあると信じた。'(金容雲「科學에도文化意識을」、『京郷新聞1983년6월9』)

6 ――――조선미「야나기무네요시의　한국미술관」『美術史學』I、민음사、1989년、p.183

7 ———— 권영필 「〈야나기신드롬의 실체〉의실체」、『가나아트』1994년6월호、p.118
8 ———— 심우성 「〈야나기〉의한국미론」、야나기무네요시저/심우성역『朝鮮을생각한다』학고재 1996년